

スクランブリングを制限する文法的特性—類型論的スケッチ

金城 國夫

上智大学 博士前期課程 言語学専攻

Abstract

This study is an attempt to make a preliminary sketch for the research program of scrambling in various languages. Assuming both external and internal Merge are fundamentally free operations to apply and scrambling is a case of internal Merge where it is applied without any restriction, I investigate a grammatical property which restrict the pure application of internal Merge in languages whose word order is rigid. In addition, comparing the languages which have long-distance scrambling and the languages which don't, I give a brief proposal on the property which makes long-distance scrambling impossible in some languages.

1. はじめに

以下の例が示すように、言語には日本語のように自由な語順が許されている言語と、英語のように語順が比較的厳密に決められているものがある。

(1) 日本語

- a. 太郎が花子にプレゼントを贈った
- b. 花子に太郎がプレゼントを贈った
- c. プレゼントを太郎が花子に贈った
- d. プレゼントを花子に太郎が贈った

(2) 英語

- a. John gave Mary a present
- b.*Mary John gave a present
- c.*a present John gave Mary
- d.*a present Mary John gave

日本語の基本語順は(1a)のような SOV であるが、(1b~d)は目的語が移動してできる文であると言われ、この操作はスクランブリングと呼ばれる。こ

のようなスクランブリングが存在する言語は日本語の他にも多数存在する
と考えられているが、そうしたスクランブリング言語の中でも、日本語の
ように節を越えて要素を移動させる「長距離スクランブリング」が可能な
言語とそうでない言語とがある。ドイツ語では(4b)のような節内でのスク
ランブリングは許されるが、(4c)のように要素が節を越えて移動するこ
とはできない。

(3) 日本語

- a. 太郎が[次郎が花子に本をあげたと]思っている
- b. 花子に_i太郎が[次郎が_{t_i}本をあげたと]思っている
- c. 本を_i太郎が[次郎が花子に_{t_i}あげたと]おもっている

(4) ドイツ語

- a. Ich glaube, [dass der Hans dem Junge das Buch gegeben hat]
I think that the Hans-Nom the boy-Dat the book-Acc given has
“I think that the Hans gave the boy the book.”
- b. Ich glaube, [dass das Buch_i der Hans dem Jungen _{t_i} gegeben hat].
- c. *das Buch_i glaube ich, [dass der Hans dem Jungen _{t_i} gegeben hat]

本稿では生成文法研究の中で長い間議論されてきたスクランブリングの
扱いを、最近の理論的枠組から見直し、各言語をスクランブリングの可能
性という点から類型論的に論じてみたいと思う。ここでは特に Chomsky
(2004, 2007, 2008)などで示されている、移動、すなわち内的併合が、外的
併合と同じくコストのかからない操作であるという見解を採用し、スクラ
ンブリングの理論的な扱いを再解釈していく。内的併合が基本的に随意的
なものであるならば、同じく随意的な操作であるとされてきたスクランブ
リングは、実は内的併合が所々の制約がかからない形で適用された現象で
あると言える。このような想定のもと、どのような文法的特性が純粋な内
的併合な適用にかかる制約となり、スクランブリング可能な言語とそうで
ない言語とに分けるのかについて考察していく。さらに、(3)、(4)のように
節を越える長距離スクランブリングが可能な言語と不可能な言語とを分け
る文法的特性についても予備的考察を行う。

2. 理論的背景

スクランブリングは生成文法研究の初期の 60 年代に始めて議論されて以来、様々な理論的取り扱いを受けてきた。本節では、スクランブリングの研究史を略述し、現在の理論的枠組みにおいて示すその重要な意味合いと、本稿で採用する理論的前提を示す。

スクランブリングという名前を最初に用いたのは John R. Ross である。彼は Ross (1967, 1986)の中で様々な言語現象を分析し、現在では馴染みとなった多くの言語現象に名前をつけている。スクランブリングもその中の一つであるが、そこではラテン語などの自由語順を持つ言語を記述するための、随意的な変形規則として提案されている。その後スクランブリングという操作はラテン語に限らず、比較的自由的な語順を持つ言語に広く適用されることになり、特に日本語の研究において中心的な役割を果たしてきた。また、原理とパラメターのアプローチが提案されると、日本語のような言語は英語のように階層的な構造を持たない非階層言語であるとする分析も登場した (階層性パラメター Hale 1980)。

原理とパラメターのアプローチの理論的な整理が進み、GB 理論の時代になると、それまでの変形規則は「任意の要素をどこへでも移動せよ」という Move α という操作に収斂されるに至る。ここでは移動は基本的に随意的なもので、余剰に生成される非文法的な文は独立した文法モジュールの原理により排除されることになる。このような想定のもとではスクランブリングの存在は理論的に何ら問題を引き起こさない。つまり、スクランブリングというのは Move α の適用に他ならず、そうして生成された文がその言語において所々の原理や制約に違反しないというだけのことである。例えば日本語の基本語順 SOV から目的語を文頭に持ってきても何の原理にも違反しないため、随意的にこの操作は適用可能なわけである。

ところが 90 年代に入り、ミニマリスト・プログラム (MP) が提唱されると、随意的な操作スクランブリングの存在は理論的に問題であるとみなされるようになった。MP は言語機能の計算部門 (C_HL) が経済性の原理に従って派生や表示にかかるコストが最小になるように、ある意味で完璧にデザインされていると想定する研究プログラムである。そして移動という操作はコストがかかるものであり、こうした完璧性からの逸脱を示すものであるとされた。しかし人間言語に移動現象が存在することは経験的な事実である。この問題に対処するため、移動という操作にはすべて何らかの積極的動機 (素性照合など) が存在し、インターフェイスからの条件を満たすためのいわば最終手段として適用されるものであるという Last Resort

の原理が提案された。Last Resort の理論のもとでは、現にある移動現象の背後には必ず動機が存在することになり、「派生の中で随意性の可能性を排除する」(Chomsky 1991: 433)ことになる。ここにおいて、随意的に適用可能であると考えられてきたスクランブリングという操作が理論的な問題として浮かびあがってくるのである。

随意的な操作を巡っては大きく分けて操作の随意性を認める立場と、すべての操作に動機を求め Last Resort の原理に従わせる立場とがある。前者の立場では派生における「コスト」という概念を再考し、スクランブリングのような随意的な操作はコストのかからない操作であり、言語機能の計算部門の最適性に抵触しないことを主張する (Fukui 1993, Poole 1996, Saito and Fukui 1998 etc.)。後者の立場をとる研究者は、一見随意的に適用されているように見えるスクランブリングなどの現象を再分析し、これらの操作も実は素性照合などの動機が駆動している義務的なものであることを主張する (Miyagawa 1997, 2003, Boskovic and Takahashi 1998, Bailyn 2001, 2003, Karimi 1999, Boskovic 2004 etc.)。この操作の随意性の問題は今日に至るまで議論されているが、意見の一致を未だみない状況である。

本稿ではこの問題に対して、まず言語の構造構築の最も基本的な(理想的には唯一の)操作である「併合」(Merge)という概念を整理し、アプローチしていく。言語表現が階層的な構造を持つ以上、そうした構造を構築する操作が必要である。MP では、二つの要素を合わせて新しい統語的構成物を作る「併合」という単純な操作を仮定している。そして「選択と併合」という操作はコストがかからず、これらは収束や経済性といった問題の外にある (Chomsky 1995: 226)」とされる。

さらに研究が進み、理論的道具立てが最小化されるにつれ、 C_{HL} における操作を併合ただ一つだけに還元する方向が示唆されるようになった。このような理論的な考察の中で先に引用された「選択」なども操作としては C_{HL} から除外され、さらには以下に引用するように、移動という操作も併合の一種であるとみなすに至った。

...Merge of α , β is unconstrained, therefore either external or internal. Under external Merge, α and β are separate objects; under internal Merge, one is part of the other, and Merge yields the property of “displacement”, which is ubiquitous in language and must be captured in some manner in any theory. (Chomsky 2004: 110)

移動を併合の一種とみなすことは、先に述べた操作の随意性の議論にも理論的な含みを持つ。もともと併合という操作はコストのかからないものであるはずなので、併合の一形態である移動と呼ばれていた操作も同様にコストがかからないはずである。こうして移動という操作は GB 理論における Move α のように、再び基本的に随意的な操作として扱われるという理論的な帰結が得られるのである。そして Chomsky (2004, 2007, 2008) では、移動が言語機能設計の完璧性からの逸脱であるという想定が誤りであり、併合は内的か外的かに関わらず、基本的にコストのかからない、自由に適用が可能な操作であるという見解が繰り返し言及されている。移動という操作があることは問題ではなく、むしろ移動という現象がほうが言語の完全性にとって問題である。このような理論的想定のもとでは、随意的な移動という操作はむしろ無標なものであり、GB 理論の頃と同様に理論的な問題を引き起こさないのである。

本稿では移動がコストの無い操作であるという上述の理論的前提を採択し、スクランブリングという操作を内的併合が他の文法的制約に抵触しない形で適用されたものであると想定する。つまりスクランブリングという操作は存在せず、あるのは純粋な形で適用された内的併合であるということである。

このような枠組みを採用すれば、これまでの MP の流れの中で議論されてきたように、操作の随意性、具体的にはスクランブリングのような操作がなぜ存在するのか、どのような文法的特性がある言語においてスクランブリングの存在を可能にしているのかということが問題なのではなく、実際に問われるべきは次のような問である。

- (5) なぜある言語ではスクランブリングが許されないのか。どのような文法的特性がその言語において純粋な内的併合 (=スクランブリング) の適用を不可能にしているのか。

従って、問題となるのは、スクランブリングがある日本語やドイツ語などではなく、英語やフランス語のような、一般にスクランブリングが許されない、比較的語順に厳格な言語のほうである。このような言語におそらく共通しているどのような特性が、内的併合の純粋な適用を妨げているのかということをも明らかにする必要がある。

しかし各言語における実際のスクランブリングと呼ばれてきた操作は当然自由に適用可能なわけではなく、¹通常様々な制限が課され、ある条件下では適用することができないのが普通である。その制限のあり方は言語によって異なっており、それが各言語のスクランブリングの特性の多様性を生み出している。²日本語のスクランブリングも Saito (1985)による詳細な研究以来指摘されているように、様々な制限があることが観察されている。最近では本稿と同じような理論的想定に基づき、日本語のスクランブリングにかかる一般的な条件を論じたものに Hoji (1985)、Kuno (2003)、Sorida (2010)などがある。本稿ではこれらで議論されているような各言語におけるスクランブリングにかかる制約について詳しく論じるのではなく、そもそもスクランブリング自体が不可能であるような言語において、どのような特性が内的併合の純粋形での適用に制限的に働いているのかという点について論じていく。

さらに、内的併合が基本的に自由に適用可能であるならば、節を越える移動も何らかの制限がかからない限り可能であるはずである。よって、長距離スクランブリングが可能である日本語のほうが、そうでないドイツ語よりもそり純粋な形で内的併合が適用されているものと想定する。そして後者のタイプの言語においてはどのような文法的特性が長距離スクランブリングを不可能にしているのかについても若干の考察をしていくことにする。

3. データ

本節では、スクランブリングと長距離スクランブリングの可能性について通言語的なデータを示す。まず始めに、言語にはスクランブリングを許す言語と許さない言語が存在する。繰り返しになるが、日本語は前者のタイプの言語であり、英語やなどの言語は後者に属している。英語においては、(7b)のような語順は特別な強勢や話題化をする場合でない限り認められない。

(6) 日本語

- a. 太郎が花子を殴った
- b. 花子を_i太郎が_{t_i}殴った

(7) 英語

- a. John hit Mary
- b.*Mary_i John hit t_i

さらにスクランブリングが可能な言語の中でも、節を越える長距離スクランブリングが可能な言語と不可能な言語とに分けることができる。以下は長距離スクランブリングが可能な言語である。

日本語

- (8) 魚を_i 太郎が[花子が t_i 食べたと]信じている

トルコ語 (Kornfilt 1997: 204)

- (9) ? kitab-_i herkes [Hassan t_i al-di] bil -iyor.
book Acc everybody Hassan buy past know -Pr-prog
“Everybody knows that Hassan bought a book.”

ペルシア語 (Karimi 2005: 17)

- (10) in film-ro_i pro mi-dun-am [ke Kimea did-e t_i].
this movie pro dur-know-1sg that Kimea saw 3sg
“I know that Kimea saw this movie.”

ヒンディー語 (Mahajan 1990: 38)

- (11) Mohan-ko_i Raam-ne socca [ki Siitaa-ne t_i dekhaa thaa]
Mohan Ram thought that Sita seen be-past
“Ram though that Sita had seen Mohan.”

次に、節内のスクランブリングは可能だが、長距離スクランブリングが許容されない言語を挙げる。

(12) ドイツ語

- a. dass das Buch_i der Hans dem Jungen t_i gegeben hat
that the book the Hans-Nom the boy given has
“that Hans gave the boy the book”
- b.*das Buch_i glaube ich , [dass der Hans dem Jungen t_i gegeben hat]
the book-Acc think I that the Hans-Nom the boy-Dat given has

“I think that Hans gave the boy the book.”

(13) ロシア語

a. knigi_i mal'čiki čitajut t_i.
books-Acc boys-Nom read
“The boys read books” (Bailyn 2003: 157)

b.*Borisa_i Moria znaet [CP čto [TP Ivan ljubit t_i]].
Borisa Moria knows that Ivan loves
“Maria knows that Ivan loves Boris” (Bailyn 2001: 646)

(14) ポーランド語

a. Roberta_i Adam zobaczył t_i.
Roberta-Acc Adam-Nom saw
“Adam saw Robert.” (Szczegielniak 2001: 137)

b.*[ten dom]_i ja wiem [CP że [TP Jan kupił t_i]].
this house-Acc I-Nom know that J-Nom bought
“I know that John bought this house.” (*ibid*: 139)

(15) チェツ語

a. zek'si_i uz-a hibore-d bikori t_i.
snake.ABS boy-ERG stick-INSTR hit
“The boy hit the snake with a stick” (Polinsky and Potsdam 2001: 589)

b.*bikori_i kidba [uza hibored t_i zak'ruli] esis
snake girl boy stick hit said
“The girl said that the boy hit the snake with a stick.” (*ibid*: 590)

4. スクランプリングの類型論

前節で述べたように、本稿での議論と関連する文法的特性には少なくとも以下の二つがある。³

(16)

P1 : スクランプリングを不可能にする文法的特性

P2 : 長距離スクランプリングを不可能にする文法的特性

この特性を組み合わせると、論理的に次のような言語が存在することになる。P1 だけを持っている言語、P2 だけを持っている言語、P1 と P2 をどちらも持っている言語、そして P1, P2 どちらも持っていない言語の 4 通りである。しかし、P1 を持っている時点でスクランブリングが不可能になるので、このうち最初のタイプと三番目のタイプは本稿の論点上、同じグループにまとめてしまっても構わない。従って、P1 と P2 の組み合わせから、スクランブリングに関して、以下の三通りの言語が存在することになる。

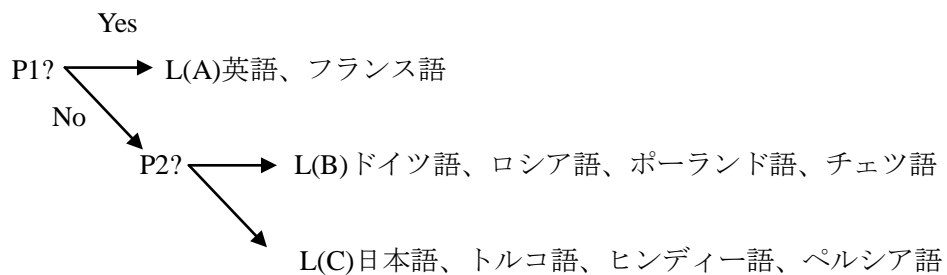
(17)

L(A) : スクランブリングを許さない言語 (P1 を持つ、あるいは P1 と P2 を両方持つ言語)

L(B) : 節内スクランブリングを許すが、長距離スクランブリングを許さない言語 (P2 を持つ言語)

L(C) : 節内・長距離スクランブリングを許す言語 (P1 も P2 も持たない言語)

(18)



内的併合の純粋な適用という観点から言えば、L(C)において内定併合も最も純粋な形で適用され、L(A)が最も制限された形でしか適用されないということになる。

5. 純粋な内的併合に制限的に働く文法的特性

前節ではスクランブリングを制限する文法的特性に基づいて、(17)、(18)のように言語を分類できることを見た。本節では、具体的にどのような特性が P1 や P2 に当たるのかということ考察していく。

5.1 スクランブリングを不可能にする特性 (P1)

5.1.1 MP とパラメーター

MP は言語現象の諸特性を、自然界を支配する一般的な原理と言語機能と結びついていると考えられる認知システムとのインターフェイスから課せられる条件によってどこまで説明づけられるかという研究プログラムである。阿部(2011)は、このインターフェイス条件との関連で、従来言語の多様性を説明する理論として用いられてきた、パラメーターという概念をMPの文脈の中で次のように位置付けている。

...パラメーターは、インターフェイス条件を満たすのに S_0 (言語機能の初期状態、筆者注) が取りうる最適な対処法が複数ある場合、その選択肢がそのまま S_0 に組み込まれ、その決定が個々人の言語経験に委ねられたものである... (阿部 2011 : 10)

本節では、このパラメーター観を採用し、ある言語においてスクランブリングを不可能にしている特性も、インターフェイス条件を満たすためのある選択肢を選択した帰結として得られるものであること論じる。

5.1.2 意味役割可視化のインターフェイス条件

では具体的にどのような条件がインターフェイスから課せられており、どのようにパラメーター化されているのだろうか。ここでは、意味役割が形式的に表示されているかどうか重要な役割を果たしていると考える。スクランブリングが可能な言語と不可能な言語を比べてみると、前者のタイプの言語においては、文中に現れる DP/NP の意味役割が、格標示という仕組みによって明示的に示されていることが分かる。⁴

日本語

(19) 太郎が花子にプレゼントを贈った

Nom IO DO

ドイツ語

(20) *Der Vater gab dem Junge das Buch.*

the father-Nom gave the boy-Dat the book-Acc

“The father gave the boy the book”

一方スクランブリングが許されない言語においては、DP/NPにはそのような格標識は付かないが、固定された語順によって意味役割を伝えている。

英語

(21) John gave Mary a present.

Nom IO DO

フランス語

(22) Jean a donné un présent à Jeanne

Jean (Nom) gave a present(DO) Jeanne (IO)

“Jean gave Jeanne a present”

このような事実から、(おそらく概念・意図を扱う認知システムの) インターフェイスから、次のような要請が課せられていると想定する。

(23) 意味役割可視化条件

文中の NP/DP の意味役割がわかるようにせよ。

そしてこのインターフェイス条件を満たすための最適な解決方法が少なくとも以下の二通りあると考える。

(24)

a. 構造上の位置固定

b. 形態的標識による表示

そうすると、英語などの非スクランブリング言語は、DP/NP の意味役割をインターフェイスに伝えるための形態的標識を持っていないため、(24b) の選択肢が利用不可能であり、その要素を固定した位置に置くこと、すなわち(24a)でしかこのインターフェイス条件を満たすことができないことになる。そしてそうして配置された DP/NP はそのインターフェイス条件が存在するために、その位置で固定されていなくてはならず、それ以上内的併合に参加すること、即ち自由に移動することができなくなるのである。一方日本語、ドイツ語のようにスクランブリング言語においては、(23)の条件を形態的な標識によって満たすことができるので、その構造上の位置は指定されず、内的併合によって基本的に自由に移動することができるということになる。まとめると、スクランブリングを不可能にしている特性

P1 は、(24b)の選択肢が利用不可能であること、つまり「意味役割を形態的に表示するシステムの欠如」であると言える。

5.1.3 帰結

上のような特性が内的併合の純粋な適用に制限的に働いているとするならば、英語のように、スクランブリングが不可能であると言われている言語においても、意味役割が形態的に表示されている DP/NP はスクランブリングが可能であるはずである。次の英語の例を見てみよう。

- (25) a. I talked to John about Mary.
b. I talked about Mary to John.

Takano (1998)は、(25b)が基本語順の(25a)から *about Mary* がスクランブリングして派生された文であると分析している。この分析は 5.2.2 の議論から自然に導き出される帰結である。英語において、文の項となる要素は固定された語順によって意味役割をインターフェイスに伝えなくてはならないが、項ではない要素に関しては、前置詞によってその意味役割が表示されるため、(24b)によって(23)の条件を満たしているため、内的併合によって移動が可能であることになる。⁵

また、英語において随意的な統語操作であるとしてしばしば問題にされてきた重名詞句転移 (Heavy NP Shift) の随意性も同様に説明ができる。

- (26) a. John gave [a book which he read yesterday] [PP to Mary].
b. John gave [PP to Mary] a book which he read yesterday.

従来の分析では重名詞句 *a book which he read yesterday* の随意的な右方移動によって(26b)が生じるとされてきたが、そうではなく、*to Mary* という PP が左方へ移動することによって派生された文である考えると、上の枠組みで説明ができる。*Mary* は *to* という形態的な意味役割表示によって、(23)の条件をクリアした DP/NP であるため、内的併合によって随意的に移動することが可能なのである。

このように、これまでスクランブリングを許さないとされてきた言語でも 5.1.2 の議論を採択すると、(25)や(26)も一種のスクランブリングであると再分析することができる。この枠組のもとでは、スクランブリングを許

さない言語や許す言語が存在するのではなく、あるのはスクランブリングできる要素とできない要素であり、一つの言語内に両者が存在するのが普通である。⁶

5.1.4 結論

以上の議論をまとめると、まずインターフェイス条件として、DP/NPの意味役割を可視化せよという(23)があり、この条件を満たす最適な手段が複数あり、パラメーター化されている。内的併合は前節でみたように、基本的に自由に適用されうる操作であるが、その純粋な適用を制限し、スクランブリングを不可能にしている特性として、(23)を満たす手段の一つである、意味役割の形態的表示システム(24b)の欠如を想定した。英語やフランス語は、形態的に意味役割を表示するシステムを持っていないため、(23)を満たすもう一方の、DP/NPの意味役割を固定した位置によって表示する(24a)という手段を取らざるを得ない。したがってスクランブリングが不可能になるのである。また、このような言語においても、意味役割を形態的に表示されているような DP/NP はスクランブリングが可能であることも見た。

5.2 長距離スクランブリングを不可能にする特性 (P2)

本稿で想定するように、内的併合が外的併合同じく、コストのかからない基本的に自由に適用可能な操作であるとしたら、節内でも節を越えた移動でも同じように可能であるはずである。しかし実際には3節で見たように、長距離のスクランブリングが可能な言語とそうでない言語が存在する。本節では校舎の言語において働いていると考えられる、長距離のスクランブリングを妨げている特性について予備的考察を行う。

ここでは問題となる言語グループは、長距離スクランブリングが可能な(17)のL(C)と不可能なL(B)であるが、それぞれのグループに共通している特性が観察できれば、それが長距離スクランブリングを制限している要因P2である可能性がある。

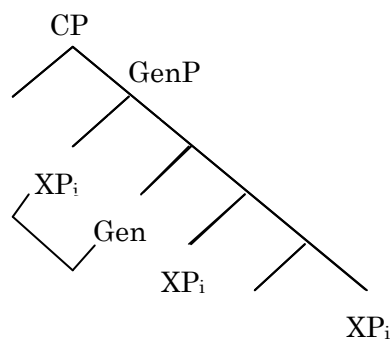
ここで、候補として挙げることができるのは、二つの言語グループの一致のシステムの違いである。両言語グループを比較してみると、長距離のスクランブリングが可能な言語L(C)として挙げた日本語には、文法的な一致現象が全く観察されず、トルコ語、ペルシア語は文法的ジェンダーが存在しない。つまりこれらの言語はなんらかの形で一致に関わる ϕ 素性が完

全ではないのである。⁷ 一方、長距離スクランブリングを許さない L(B)として挙げた、ドイツ語、ロシア語、ポーランド語、チェツ語はいずれも人称、数、ジェンダーのすべてにおいて一致を起こす言語である。つまりこれらの言語においては ϕ 素性が完全なのである。こうした観察から、以下の仮説を提案する。

(27) ϕ 素性の完全性が長距離スクランブリングを不可能にしている

もしこれが正しい仮説だとしたら、どのように ϕ 素性の完全性が内的併合の節を越えてなされることを阻止しているのだろうか。ここでは以下のような仕組みを仮定する。

(28)



内的併合の循環的適用の途中で、節フェイズの中にあるなんらかの機能範疇（ここでは仮に **GenP** としておく）の主要部に隣接する位置へ立ち寄る。そうすると、この機能範疇の主要部と立ち寄った **DP/NP** が一致関係を結ぶ。そしてさらに以下のようなことを要求するなんらかのインターフェイス条件が存在すると仮定する。

(29) **Gen** との一致関係は構造的に表示されていなくてはならない。

この条件によって、**Gen** と一致を起こした **DP/NP** はその位置で固定されていなくてはならず、従って節を越えることができない。⁸

しかしながらこの仮定は予備的なものなので、理論的にも経験的にもこれから追求していく余地のあるものであり、これ以上の議論にはここでは立ち入らない。論証のためのさらなる経験的、理論的考察が必要である。

6. 結論と今後の課題

本稿では、内的併合がコストのかからない無料の操作であり、スクランブリングというのは純粋な形の内的併合の適用であるという想定から、各言語のスクランブリングを、内的適用の適用を制限する特性を元に、比較分析した。スクランブリングが存在しないとされる英語やフランス語においては、DP/NP の意味役割を可視化せよというインターフェイス条件を、DP/NP の構造的な配置によって満たしているが、日本語、ドイツ語などのスクランブリング言語においては、形態的な格表示システムによってこの条件を満たすことができるために、要素の自由な移動が可能であることをみた。さらに、英語などの言語においても、前置詞によってその意味役割が明示されている要素に関してはスクランブリングが可能であることも、本稿の枠組みは正しく予測している。

最後に、日本語タイプの言語とドイツ語タイプの言語を分ける、長距離スクランブリングを制限する文法的特性についても議論した。ここでは、文法的一致に関わる ϕ 素性の完全性が長距離スクランブリングの適用を不可能にしているという可能性を示した。しかしこの特性と長距離スクランブリングの関係については、理論的なメカニズムと経験的妥当性の両面で不十分な点があるため、今後の課題としたい。

*本稿は、上智大学言語学会第26回大会での口頭発表の内容をもとに、加筆・修正したものである。本発表にあたり、貴重なコメントとアドバイスを頂いた早稲田大学の久野正和氏と、成田広樹氏、上智大学の藤田元氏、小林ゆきの氏、そして会場での質疑応答で有益なコメントを下された方がたに感謝の意を表したい。また、本研究の発表の場を提供してくださった上智大学言語学会に深くお礼を申し上げる。なお、言うまでもなく、本稿の内容中の誤り、不明瞭な点はすべて筆者の責任によるものである。

注

¹ 本稿では便宜上、引き続き従来のスクランブリングという名称を用いる。

- ² ドイツ語に関しては Grewendorf and Sabel 1999, ペルシア語に関しては Karimi 2005 に詳しい
- ³ スクランブリングした後、その要素が再構築化(reconstruction)するかどうかは言語間で異なる重要な性質であるが本稿では扱わないことにする。関連する議論に関しては Kuno 2003 およびそこでの引用文献を参照。
- ⁴ 本稿では格表示が意味役割が密接に関連しており、ある種の意味役割の表示は特定の格表示によって実現されうることを仮定する。
- ⁵ なぜ文頭などには移動できないのかに関しては本稿では扱わない。なんらかの別の制限が働いていると考えられる。
- ⁶ スクランブリング言語とされてきた日本語などにおいて、(24a)の選択肢が利用不可能であることは含意しない。日本語においては各標識が省略可能であることが知られているが、このような場合は、(25b)によってインターフェイス条件を満たすことができないため、(26a)が利用される。
 - (i) 太郎 花子 殴った。においては、行為者は太郎で被害者が花子であって、逆にはならない。
- ⁷ ヒンディー語に関してはジェンダーが存在するが、歴史的にジェンダーシステムが簡素化されてきていることが何らかの影響を与えている可能性がある。
- ⁸ ロシア語、ポーランド語では(13)、(14)に挙げたように Indicative 節からの長距離スクランブリングは不可能だが、Subjunctive 節からの長距離スクランブリングは可能である(Bailyn 2001, Szczegielniak 2001)。このような節ではなんらかの形で GenP が欠如していると考えられる。

参考文献

- 阿部潤. 2011. 「極小理論におけるパラメータの位置づけ」, 『東北学院大学論集 English Language and Literature 第95号』東北学院大学学術研究会. 1-40.
- Bailyn, John Frederick. 2001. On Scrambling: A Response to Bošković & Takahashi, *Linguistic Inquiry* 32(4): 635-658.
- Bailyn, John Frederick. 2003. Does Russian Scrambling Exist? In *Word Order and Scrambling*. ed. by Simin Karimi. 156-176. Oxford: Blackwell.
- Bošković, Željko. 2004. Topicalization, Focalization, Lexical Insertion, and Scrambling, *Linguistics Inquiry* 35, 613-638.

- Bošković, Željko. and Daiko Takahashi. 1998. Scrambling and Last Resort. *Linguistic Inquiry* 29: 347-366.
- Chomsky, Noam. 1991. Some Notes on Economy of Derivation and Representation, In *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. ed. by Robert Freidin. 417-454. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2004. Beyond Explanatory Adequacy, *Structure and Beyond-The Cartography of Syntactic Structure*, vol. 3. ed. by A. Belletti. 104-131. New York: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. 2007. Approaching UG from Below, *Interfaces + Recursion = Language?*. ed. by U. Sauerland and H.-M. Gaertner, 1-29, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam. 2008. On Phases, Foundational Issues in Linguistic Theory. ed. by R. Freidin, C. Otero, and M.-L. Zubizarreta. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Fukui, Naoki. 1993. Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24: 399-420.
- Grewendorf, Günther and Joachim Sabel. 1999. Scrambling in German and Japanese: adjunction versus multiple specifiers, *Natural Language and Linguistic Theory* 17, 1-65.
- Hale, Kenneth. 1980. Remarks on Japanese phrase structure: comments on the papers on Japanese syntax. In *MIT working papers in linguistics* 2:185-203. Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
- Hoji, Hajime. 1985. Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese. Doctoral dissertation, MIT.
- Karimi, Simin. 2005. *A Minimalist Approach to Scrambling: Evidence from Persian*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Kornfilt, Jaklin. 1997. *Turkish*. New York: Routledge.
- Kuno, Masakazu. 2003. Scrambling in Japanese as Pure Merge, *Linguistic Research*. 19. 45-78.
- Mahajan, Anoop K. 1990. *The A/A-Bar Distinction and Movement Theory*, Doctoral dissertation, MIT.
- Miyagawa, Shigeru 2003. A-Movement Scrambling and Options without Optionality. In *Word Order and Scrambling*, ed. by Simin Karimi, Oxford: Blackwell.

- Polinsky, Maria and Eric Potsdam. 2001. Long-Distance Agreement and Topic in Tsez. *Natural Language and Linguistic Theory*. 19. 583-646.
- Poole J. 1996. Optional Movement in the Minimalist Program, in *Minimal Ideas*, ed. by Werner Abraham, Samuel D. Epstein, Haskuldur Thrainsson, C. Jan-Wouter Zwart, 199-216. Amsterdam: John Benjamins.
- Ross, John R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru. 1992. Long Distance Scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1, 69-118.
- Saito, Mamoru and Naoki Fukui. 1998. Order in phrase structure and movement. *Linguistic Inquiry* 29:439-474.
- Sorida, Masanobu. 2010. Scrambling and Free Merge: A Preliminary Sketch, *Sophia Linguistica*. 58, 71-90.
- Szczegielniak, Adam. 2001. Polish Optional Movement, in *The Minimalist Parameter. Current Issues in Linguistic Theory Series*. ed. by Galia Alexandrova. John. Benjamins. 125-148.
- Takano, Yuji. 1998. Object Shift and Scrambling, *Natural Language and Linguistic Theory*. 16, 817-889.